

マスコミ
やらせ番組発売で問う
メディアの公共性

民放テレビ局の相次ぐやらせ番組制作の対処策として、日本民間放送連盟に「放送番組調査会」が設立された。矢先今度は、NHKでやらせ番組があったことが発覚した。

問題の番組は、昨年の9月30日と10月1日、2日間に渡って放送され、高視聴率を得た「奥ヒマラヤ禁断の王国・ムスタン」という番組。事実と異なるのは、まず、取材班が断崖をくりぬいた、非常に危険な箇所を二日間かけて進んでいくという場面だが、実際ここを登ったことのある登山家に言わせるとたった数時間で歩けるという。次に、スタッフの一人が高山病で苦しむ姿が放送されたが、実はこれ、病気が治ってから撮影されたということらしい。さらに、この時の病状もかなり大げさに表現されるなど、他にも数カ所の偽造シーンがあった。そして致命的なのは、番組全体のトーンで、現地を厳しい環境の秘境としていたが、取材された場所は、昔から中国とチベット、インドを結ぶ大動脈で人跡未踏の地ではないとのことだ。それどころか秘境をイメージするため、わざと崖や川の中を歩いたり、流砂をつくったりしていたことも明らかになった。これには、現地のホテルマン、案内人なども首をかしげていたという。

この件に関してNHK放送総局長は「しっかりとものを撮りたいという思い込みが先走った」と弁明したが、それならば、制作者側はこの「しっかりと」という言葉の意味を根本的にはき

違えていたのではないだろうか。例えば、これがドラマであったなら、過剰な演出も行き過ぎた表現も、時に制作者の熱意、意気込みとして受けとめることができる。しかし、これはあくまでもドキュメンタリー番組である。いうまでもなく、ドラマは虚像の世界。ドキュメンタリーは現実の世界である。しっかりとものを撮りたかったというのなら、ありのままの事実を撮ること。それ以外にないのではないか。

民放番組のやらせが、制作費の切り詰めや視聴率競争といった状況下で生じているのに対し、今回のNHKでは、当番組が、NHKの看板番組であったということから、内部の功名争いが呼び込んだとの専門家の弁もある。確かに大役を任されたディレクターの気負う気持ちもわからなくはない。しかし、気負いよりも何よりも真のプロの制作者であるなら、電波の公共性というものを十分考えるべきではなかったか。意気込み過ぎたことや内部の功名争いなど、視聴者にはなんの関係もないことである。電波は一人のものではなく、みんなのものである。つくる側の自己陶醉や一人よがりほど、観ていておもしろくないものはない。

社会
日本人女性の象徴?
ローマ6人レイプ事件

ローマ市内で団体旅行中の19歳の日本人女子大生6人が、イラン人とイタリヤ人男性に暴行されるという事件が起きた。警察が発表したところによると、逮捕された主犯の男は、日本語もペラペラ。おまけにローマでは空手などの

武術を教えているほどの猛者とのこと。何も知らない女子大生6人は、甘いマスキの外人男性に、映画「ローマの休日」で有名なスペイン広場で声をかけられ、そのまま男の自宅にお邪魔した。スパゲティなどの料理をご馳走になり、楽しいひと時を過ごしたかと思つたが、男は豹変。6人を専らに連れ込み、日本刀で脅し、次々と6人をレイプした。6人の女子大生は、あまりの恐怖に声もせず、抵抗できなかったというが、しかし、この事件。そもそも、そう簡単にいく方もついていく方ではないか。勝手知ったる日本でさえ、このような状況であれば、万が一のことを思つたらう。まして、見知らぬ国ともなれば、なおさら警戒すべきであるし、誘われてついていくことに、多少なりともそのような事態が起こり得ることは容易に予測できたはずだ。

「身なりもきちっとしていたシルックスもい。それにこっちは6人だったから」そう6人の被害者は警察に弁明したそうだが、彼女らの言うとおりの6人もいたなら、それこそなんとかならなかつたのか。どんな状況で暴行されたかは当の本人たちでない限りわしくはわからないが、いくら相手は空手の猛者で日本刀を持っていたとしても、結局は一人である。なんとでも方法はあったように思うのだが。

犯人わり出しのきっかけが、女子大生たちが犯人と一緒に撮った記念写真からというのを聞いても、なんとなく同情する気にはなれない。それにしてもこんなことが本当にあるのだから、日本人女性が、外国人からイエローキャブと言われてしまうのもいたしかたのないことなのかもしれない。まったく

スポーツ
組織の力であつた
史上最年少大関・貴ノ花

外人に弱い日本人女性のあさはかさを象徴する事件である。彼女らのちょっとしたスキがとんだ「ローマの休日」となつてしまったようだ。

日本の国技である相撲において、史上初、外国人横綱・曙が誕生。国内外のトップニュースとして人々を驚かせたのはまだ記憶に新しい。しかし、ここで一番驚いたのは、やっぱり貴ノ花だ。め貴ノ花が大関に同時昇進したことが、先場所、好調を滑り出しを見せた貴ノ花だったが、中日に栃乃和歌に負けたあたりから調子を崩し、あつという間に3連敗。この時点で当然、誰もが昇進はないと思つた。千秋楽結びの一番では、新横綱、曙の一方的な勝利であつてなく奪を閉じ、昇進は完全に立ち消えたかのように思われた。しかし、そこは、日本の相撲界。昇進定から見、曙を横綱にしないわけにはいかない。といつて、曙だけを昇進させれば、大関小鏡、関脇武蔵丸と上位をハワイ勢で占められてしまう。いくら何でもそれはまずい。そこで協会側が考えた。と予測されるのが次のような内容だ。

鏡山親方(元横綱柏戸)の説によると、初場所千秋楽は、本割で曙が勝てば同時昇進。本割で貴ノ花が勝ち3敗で終われば「決定戦で貴ノ花が勝てば貴ノ花のみ昇進」「決定戦で曙が勝てば曙昇進。ただし、貴ノ花が12勝3敗で直前2場所の成績を加算すると36勝の計算になるため前例にならつて昇進。つまり、貴ノ花の昇進は14日目にして

私、悩んでいるわ。

占屋敷



僕も悩んでいます。

友人関係は？

金運は？

仕事は？

恋愛は？

受験は？

今月の運勢

- 一 白水星 移り気になりやすいので浮気心は決して起こさぬ様に目上の人を大切にすることによって喜心が多くなるでしょう。
- 二 黒土星 結婚を懸念する様になるのでよく考えて自分にとって良いかどうかが良い目で見ることが大切。
- 三 碧木星 焦らずじっくりとお付き合いをする事。お互いに良い所を見つけて助け合ってね。
- 四 緑木星 楽しく心浮き浮き。結婚を考えている人は多少の不満があっても手を打つ時です。
- 五 黄土星 見合結婚はまとまります。今月はチャンスなので自分の出来る範囲で努力する事によってうまくいきます。
- 六 白金星 何となくイライラする時、焦らずじっくり考えて今が大切な時。
- 七 赤金星 恋も仕事もうまくいかない時。何事もがまんして……来月は楽しくなるでしょう。
- 八 白金星 食べたり飲んだり遊んだり出費もあるけれど恋愛結婚は成功するでしょう。
- 九 紫火星 家庭的な楽しさを求めている人と、変化を期待している人がいるのでうまくチャンスを生かしてほしい。

※悩み事や相談その他何でも承ります。詳しいことは **占屋敷** で。

ロポ易・性格適性診断機・ファラオの予言・
 願陀巫羅占いマシーン
 人相・手相・タロット占い・性名判断・
 気学・西洋占星術・四柱推命etc.

平日 13:00~20:30
 土・日・祭日 12:00~21:00
 四条河原町下ル200m西側
 ☎(075)352-3558

IF・2F
占い心庵
 易心庵
 3F



この券ご持参の方に限り
20%OFF
占屋敷

すでに決っていたというのが最も有力な説であると話している。いうなれば曙の昇進は貴ノ花の大関昇進の副産物ともとれる内容である。

いうまでもなく、今の相撲人気を支えるのは貴ノ花である。協会側としては、相撲人気に拍車をかけるため、無理矢理にでも史上最年少の大関、貴ノ花をつくりたかった。そして、やはり宮沢りえとの一件で、すっかりミソをつけた至宝、貴ノ花のマイナスイメージを払拭する（こちらは、宮沢親娘の痛烈な反撃により失敗したが）。これが今回の同時昇進の一番の理由だろう。

記録は塗り変えた、マスコミは史上最年少大関をもちあげる。しかし結局のところ、貴ノ花は組織によってつくりだされた大関に過ぎない。周囲の力に押し上げられてその地位を獲得したものと、実力でその地位を獲得したものとでは、どちらが本当に強いかは自明の理であり、組織のお膳立てをしつかり受けとめてしまった時点で、すでに勝負は決

教育

業者テスト廃止で広まる偏差値問題の波紋

昨春秋あたりから声高にその実施の善し悪しが叫ばれた業者テストにつ

まった。周囲からの圧力がまったくなかったとはいわないが、それにしても「不撓不屈の精神」と口にしている男が、結婚をとるか相撲をとるか迫られ、どちらもとるといえないなかったのは、明らかにその言葉の意味に反するものであり、精神力の弱さを見せつけた。それにひきかえ、ただでさえ厳しいといわれる相撲界で、さらに言葉、風習、何もかもが生まれ育った国とは異なるハルデを背負いながらも自力で這い上がり外国人初の横綱となった曙。心技体すべての面においてその差は歴然である。貴ノ花の言う「不撓不屈の精神」にはいったいどんな意味が含まれているのだろうか。

いて、このほど文部省がついに排除するとの最終決定を下した。中学側に対しては私立高校の入学者選抜に際しての結果（偏差値）提供はもちろん、授業中の実施や教師の監督など関与を禁止。高校側もこれを求めないことを強く要請した。これまで、その実態を知っていたいながらも自虐を言い渡す程度で、当たり前とさえ受けとめられていた業者テストだけに、中学や私立高校はもちろぬ、業者にも相当なショックを与えた。文部省側がこのような厳しい結果を出すに至った理由には、私立高校が業者テストの偏差値で入学予定者を早く決める、いわゆる青田買いしている現状のあげくの果てではあるが、この決断に対して、関係者の中には、塾通いが増えるだけ、や、早めに可否の目安がわかれば生徒に志望校変更などの適切な進路指導ができる、との声もあり、まさに賛否両論の意見が飛び交っている状態。

トをやめ、偏差値で判断することをなくしたとしても、また別の物差しが出てくるのは明らかである。偏差値問題の中にあるのは、結局のところ、何でもひとつの尺度を求めたがる日本人の根本的な気質ではないだろうか。実際、偏差値が取りざたされていなかった時でも、学校の中の順位で判断されていたわけで、ただ、今回の業者テストの廃止により、ひとつの窓口だけでなく、もっと広い窓口が生まれるかもしれないという期待は持てる。

「業者テストをなくすと、必ず子供が混乱する」という声がかかるが、テストがなくなることと落ちる子もいれば、合格する子も増えている。混乱に強い子が有利になってもいいじゃないか」と森毅さんの意見にもある通り、受験とは一種のサバイバルである。教わる方、教える方とも業者テストに頼りきっていた過去を払拭し、本当の混乱に打ち勝てる対策を、見直すべきではないだろうか。